

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

タブノキの大木になった気分人間社会を眺めてみれば、日本もまたピンチに見えます。森は私たちのようにおしゃべりではありません。何の理屈も語ろうとはしません。それでもさすがに人間社会のことを心配しているようにも見えます。

植物は根で勝負なら、人間もまた根で勝負。人間の根とは足腰のこと。なにやら人間社会では、頭でっかちなばかりが増えて足元フラフラ。いまにも倒れてしまいそうに見えます。

その頭の使い方にしても、どうも私たち日本人は小手先の対応はうまい反面、未来を見据えた長期的な展望、計画、対策の立案・実施は不得意なようです。

東日本大震災後には数多くの政治家や各省庁の方々とお会いしましたが、トップの方を眺めてみても、目先の問題をどうするかという小手先のことでもう必死。私には「秋の田んぼのバッタ取り戦法」にしか見えません。目の前のバッタを取ったところで、バッタはいくらでも出てくるわけで、本質的な解決にはなっていないのです。

人間社会として自分の欲望だけを追い求めて、他人を打ち負かすような競争関係だけでは成立しません。その一方で、好きなものだけ集めて仲良しグループを組んだところで、周りが見えなくなつて別の危険を伴います。「まじえる・まじえる（混ぜる・混ぜる）」が本場に必要なのは、政界や官界ではないかと思ったりもします。

植物社会が示した「競争・我慢・共生」のルールは、人間を含めたすべての生物が生き抜くための基本的かつ本質的な掟であり、真実の姿と言えるのではないのでしょうか。

私の講演会に参加くださった方からは、植物社会と人間社会が「結構似ている」との感想をいただくことがあります。しかし私からすれば、似ているのではなく同じなのです。アナロジ（類似関係）ではなくて、ホモロジ（相同関係）だと思っています。

生物は元来保守的で一度決められたことは容易に変えられません。中でも動く力のない植物ほど実直に暮らしている生物は他にいません。だからこそ、生物社会の本質がそこにある。植物屋の単純な発想かもしれませんが、私にはそう思えるのです。

現場に出て自然が発している微かな予兆に耳を傾ければ、見えない全体も見えてきます。その奥にある本質も見えてくるのです。

文豪ゲーテが語っているように、自然は「アルス・ガンツハイト」(als Ganzheit)、「つまり「全体のつながり」として見ることで初めてその本当の姿が見えてくる。そうやってトータルシステムとしての自然と人間の関係を正しく理解し、人間サイドからの一方的な見方をいまこそ謙虚に見直すべきではないでしょうか。

森の力―植物生態学者の理論と実践

宮脇 昭 著

講談社現代新書

問題

著者の主張をふまえ、あなたの考えを八〇〇字以内で記述しなさい。